本社登山隊ルポ

夏山踏破 鳥海

〈第3日〉

御浜小屋 ― 一ノ滝

山形新聞の鳥海山登山パーティーは31日、3日目の行程に入った。御浜小屋で鳥海山の尾根筋から立ち上る朝日と影鳥海を目にし、笙ケ岳では日本海の眺望を堪能した。

＝1面に関連記事

影鳥海 日本海へ貫く

午前4時半の起床とともに御浜小屋からカメラを持って外に出る。間もなく新山から続く山筋の陰から朝日が姿を現した。西に目を転じると、庄内平野を突き抜け日本海へと貫くように影鳥海がくっきり浮かび上がった。

県山岳連盟副会長で山岳指導員の高橋実さん(62)が前日の30日に合流しパーティーをサポートしてくれた。よわい60を超えて壮健。歴代担当者が見上げるほどの健脚の持ち主だ。小屋を出発し、高橋さん、東北山岳ガイド協会の吉田岳さん(49)を追って進む。

この日も晴天。御浜小屋からは頂上の新山、行者岳、伏拝岳が望める。一行は鳥海湖を右手に見て時計回りに1周弱旋回し、笙ケ岳へと続く三峰、二峰へと入った。草が山肌を覆い、その間を縫うように木道が続く。左手には麦わら帽子の形に似た鍋森。秀麗な鳥海山にあって個性際立つ存在だ。山形大理学部で地学を専攻し、鳥海山西部の火山活動を調査しているワンダーフォーゲル部の久次米晃輔さん(21)＝同大4年＝は「写真で見るのとは実際は違う。自然の壮大さを改めて感じた」と目を見張った。

目当てのニッコウキスゲは盛りを過ぎていたが、白い花をつけたハクサンイチゲ、頭を垂れたチョウカイアザミ、釣り鐘形のハクサンシャジンなどが風に揺れる。空を見上げれば猛禽（もうきん）類のハチクマが悠々と天空を旋回。笙ケ岳の頂上に立てば飛島が浮かぶ日本海の水平線が壮大な半円を描いていた。

前日のハードな登りから一転、この日の山行は下り続き。歩き慣れぬ記者は砂利や岩場で足を滑らせ、肝を冷やすシーンがしばしば。吉田さんに助言を求めると、足の裏全面を使って歩くことに加え、「『滑らない』と強く思うこと」と。即実践、それでも思うに任せない。下りの道は一日してならず、か。

草地から低木のアーチが続く道へと入り、ブナ林へ。厚く重なった枯れ葉がクッションとなり足取りを軽くしてくれた。

この日、夏山登山企画に参加して11回目の小林達也記者が一行とは別行程で下山した。行程2日目の30日、連続する登り道と暑さで体力を消耗し、太ももこむら返りや立ちくらみなどの症状があり、熱中症が疑われた。同日のうちに体調は回復したが、大事を取って秋田県側の鉾立口に下りる決断をした。山に入る際には入念な準備と体調管理が重要だと改めて思い知らされた。

（鳥海山登山企画取材班・木村敏郎、斎藤健太）

爽やかな風が吹き渡る鳥海湖周辺を歩く

左青紫色のミヤマリンドウ。愛らしいたたずまいで登山者を癒やす

右斜面に咲くハクサンイチゲ。時折風に揺られ、爽やかな風情を醸し出す

鳥海山のシルエットが庄内平野や日本海に映し出される影鳥海。自然が作り出す景観から、出発前のメンバーは元気をもらった

＝遊佐町